



異世界転生!

マラれる前に

魔鬼王様

小説 磯貝武連

挿絵 弥弛

試し読み版

2DB  
二重丸プロダクション

第一章	異世界からの来訪者	006
第二章	真実を知る時	053
第三章	幼馴染みの告白	097
第四章	動き出す運命	133
第五章	魔王の計画	190
最終章	微睡 <small>まじろ</small> む朝に	225
書き下ろしエデル編	少女悪魔と魔王	250
書き下ろし媛乃・柚子編	兄と義妹とその幼馴染み	259

## 登場人物紹介

エテル・ワイス・ブローグヒ

魔王に忠実な女悪魔。

たかそり けいたろう  
鷹杜 慶太郎

現代に暮らす普通の男子学生。その正体は異世界より転生してきた魔王。

たかそり やす  
鷹杜 柚子

慶太郎の妹。強気な性格で特に兄に対してはいつもツンとした態度で接している。

みづらぎ しめの  
御鶴城 媛乃

慶太郎の幼馴染み。クールな性格だが芯の強い少女で、慶太郎を傍で支えている。



やがてそんな長いキスが終わると、エデルは舌を口から出したままゆっくりと身体を離れた。唾液が糸を引くとそれを艶めかしく指で拭いエデルは優しく微笑んだ。

「な……に、を……え？ あ……なんで」

キスをして男が言うにはあまりにも間抜けな台詞だった。しかしどうしても問わずにはいられない。その答えをエデルは濡れた唇を舐めてから答えた。

「我が君の御魂はその肉体に閉じ込められた状態にあります。それを覚醒させるには大量の魔素が必要になります。こちらに来て分かったのですが、この世界は魔素が薄く、それでは我が君の御魂が覚醒するまで魔素が貯まるのに時間がかかりすぎるかと。なので」

エデルはそう言うのと慶太郎を押し倒すように身体を重ねてきた。自室の床に寝転がされた慶太郎は自分を押し倒す妖艶な女悪魔を呆けたように見つめる。

「私の魔素を我が君のお身体に流す事で呼び水としますので……ちゅ……ちゅ……ちゅ……ちゅ……ちゅ……早くご覚醒を……んん、ちゅう……れる、べちゅ……促して、んちゅ」

言葉の途中途中でキスを挟んでくるエデルに抵抗も出来ず慶太郎はキスの快楽に蕩けた。正直に言えばファーストキスだった。なので現状に対する驚きよりもキスという行為の気持ちよさへの驚きの方が勝ってしまう。

ただ唇を重ねて舌を絡め、互いの唾液を啜り合う。それだけの行為なのにこんなに気持ちいいなんて。

予想以上に長いエデルの舌が自分の舌を舐め回し、唾内を蕩かしてゆくと、慶太郎は悶

えるように「んふあ」と息を漏らし自分からも舌を動かしてしまふ。

それが余程嬉しかったのか、エデルは舌の動きを増して慶太郎の喉奥にまで舌を入れてくる。女悪魔の甘い唾液が慶太郎の中にどんどんと流れ込んでいった。

「ちゅぱ……ちゅう……ん、んふあ……はあ、んん、ちゅー」

呼吸さえままならないキスを受けていると、頭の中に曖昧な物が浮かび上がってくる。それは記憶とも呼べない朧気な物で、慶太郎自身はそれが何なのか分からないままキスを続けてしまった。

さつき以上に長いキスがようやく終わると、エデルは身体を離して艶やかに微笑んだ。頭を下げて「我が君」と泣きそうな顔で呼んでいた時の可愛らしさが今は完全な妖艶さへと変化していた。

その微笑みを見せながらエデルはそつと慶太郎の一番熱くなっている部分に指を触れさせる。制服のズボンを内側から押し上げる股間部分である。

初めてのディープキスの快楽に若い性欲は完全に勃起してしまっていた。それを愛おしげに撫でるエデルに慶太郎は「あ！」と言って身を振った。しかし上に乗っかる女悪魔はそれを許さなかった。

「動いてはなりません……もつと深く粘膜同士を絡めて魔素を注入しませんと」

「ねんまく……からめ、つて、あ！ ちょ、待つて!!」

制止の言葉も聞かずエデルは慶太郎のズボンを慣れた手つきで脱がせた。そして先走り

のシミが浮かぶ下着もだ。すると中からは血管を浮かせてパキパキに勃起した若いペニスが飛び出してきた。

汗をかいて風呂にも入っていない為、そこからは汗蒸れした強い臭いが漂ってくる。それをエデルは蕩けそうな顔で嗅ぎながら顔を寄せていった。

「素敵な香りです……ああ、我が君の若い香り……これを愛おしむ事が出来る栄誉を授けて頂けるなんて」

「さ、授けてない！　だ、ダメだって！　本当に！　なんで、こんな、あ、ああ！　うああ！」

フェラチオをして貰えるという悦びよりいきなりの展開への拒絶感が強い。だから必死にダメだと言う慶太郎だが、その雄臭さに酔ったエデルは艶やかな唇の中に張り切った龟头を飲み込んでしまうのだった。

「うわ、うわ！　な、これ……つく！　ああ！　ふひゃ!!」

腰を浮き上がらせながら口腔粘膜が肉棒を擦り上げる気持ちよさに声を上げる慶太郎は自分のペニスが龟头先から蕩けてゆくような感覚に震えた。

エデルの温かな口腔が全体で肉棒を締め付け、その中でキスの時も感じた長い舌が絡み回ってゆく。塗りつけられる唾液のヌルヌルした感触はそれだけでも十分に気持ちいいのに、特に雁首や裏筋を集中的に責められると呼吸をする事さえ忘れてしまいうるようになる。

逃げなきやいけない、やめさせなきやダメだ。そうは思うのだが、強烈すぎる初めての

快楽は慶太郎から抵抗する力さえ奪っていた。何せオナニーとは比べ物にならない気持ちよさなのだ。

それでも精一杯力を込めて何か言おうとエデルに顔を向ければ、そこでは上目遣いの女悪魔が嬉しそうに勃起ペニスを咥え込んで、

「ん……ちゅっぷ……ぺちゅ、れるお……れちゅ」

美しい顔を不細工に歪ませて口淫行為に耽<sup>ふけ</sup>っているのだ。エロ動画でしか観た事がない女性のフェラ顔を間近に見て、しかもその快楽を直に受ける。気持ちよさに興奮が入り交じって慶太郎を更に昂らせてしまった。

「つく！……つふぁ！ んん、お、う！」

床に寝た状態で腰を上下にカクつかせフェラチオに酔う慶太郎は、その強すぎる快楽に反射的にエデルの角を掴んでしまった。

突然の行為に一瞬驚いたようなエデルだが、その角を掴まれるというのが余程嬉しいのか、窄めた頬を今迄以上に朱に染めて口腔愛撫の威力を強めていった。

それはまるでその角に性感帯が存在するようで。そんな事をまるで理解していない慶太郎はまた強烈になった舌の動きにより角を掴む手に力を込めてしまう。

「ん、んん！ んんぶ、んぶ！ ちゅっぷうう!! ふぁ、ん、んんつぶ!! わふぁひみ、ん、んん！ ぢゅずつぶ！」

もう舌がどう動いているのか、唇をどう使って肉茎を擦り上げているのか、慶太郎には

見当もつかない。ただ圧倒的な快楽がペニスから脳へと背筋を通って襲ってくる。

やがてその気持ちよさは精巣を震わせ、その奥から熱い白濁を込み上げさせる。

「うああ！ だ、め！ エデル！ それ以上、は、ほんとう！ わり！ 出る!! 出るから！」

射精してしまうという告白にエデルはどうぞと言わんばかりに肉棒を深く飲み込んだ。

「ぢゅぶう！ ぢゅ、ぢゅずうう！ れろ、れろれる、れろお、ぢゅれろお！ ぢゅつぶ！」  
喉奥の締め付けは一際強くて、慶太郎は思わず「うっぐ！」と喉を鳴らし涎を垂らしてしまう。そしてそのまま、

「う、つく！ ううっぐ……あああ！ だ、め……で、でるう！ おああ！」

叫びを上げてエデルの角を掴んだまま腰を突き出した格好で射精した。

びゅ！ びゅっぐ！ どっびゅ！ どびゅ、どびゅ、どびゅっぐ！ びゅつぶ、びゅうう！ ぶびゅう！ どっびゅ、どぐどぐ！

呆れるくらい長く激しい射精に、慶太郎は「あああ」と気の抜けた声を出し震える事しか出来なかった。

一方その強烈な射精を受けたエデルは、喉奥にほとばしる総てを受け止めて、その臭く濃厚なゼリー状のザーメン液を全部飲み干した。

「んぎゅ、ごっぐ、んっぐ、ぎゅふ……んぶ、んぐ……ぶふあ……はあ」

ザーメン臭い息を吐きながらエデルは身体を起こすと慶太郎にこうこつ恍惚の笑みを見せた。そ

の表情はまるで精飲出来た事に礼を言っているようにさえ見えた。いや、実際彼女はそう感じているのだ。

だが慶太郎にしてみれば、出会ってから一時間も経っていない女性にいきなりフェラチオをされて、しかも唾内射精までしてしまったのだ。射精快樂の余韻がひくと青ざめてしまうのも無理はない。

謝罪しなきゃいけないとも思うが、唾えたのも飲み込んだものエデルなのでそれはおかしき気もする。けれど、兎に角何か言わなければと身体を起こそうとした慶太郎だったが。「ご記憶は……まだお戻りになってはいないようですね……それなら」

慶太郎が上体を起こすよりも早くエデルが自分の着ているドレスに触れた。瞬間そのドレスの胸前が独りでに開いて、中から溢れ零れるように乳房が出てくる。

目を伏せる事も出来ずにその二つの大きな肉塊を見た慶太郎は、柔らかく揺れるそれに釘付けになってしまう。

初めて生で見る女性の乳房。重くないのかと心配するほど大きくて、血管が透けて見えそうなほど真っ白くて、その先端には淡い桃色の陥没乳首が乗っている。

見事な巨乳に見入っている慶太郎にエデルは照れ臭そうにはにかみながら、

「我が君の眼前にこのような物を晒す不作法をお許し下さい……ですが、魔素を我が君のお身体へと行き渡らせる粘膜接触を行うにはもう一度大きくしませんと」

もう一度と鸚鵡返しに呟く慶太郎にエデルは頷き、そして乳房の間に自分の唾液でベッド

ベッドに濡れた肉棒を挟み込んだ。

いきなりのパイズリ、しかも射精直後の敏感になった肉棒にである。またしても対応が遅れた慶太郎は「あ」と言う暇もなく柔らかかなおっぱいマ○コに欲棒を擦り上げられた。

大量のザーメン液を吐き出して萎みかけていたペニスは乳房の想像以上の柔らかさに硬度を取り戻してゆく。

エデルの乳房は適度な乳圧が万遍なく肉棒を包み込み締め付けてくる。唾液のローションがそこに強力な刺激を与えていて、包まれる感覚と敏感亀頭が擦れる感覚が全く別ベクトルの性刺激をもたらすのだ。

下世話な友人に「パイズリは気持ちよくない」と聞いていた慶太郎は、その間違いを本気で指摘したくなかった。これが気持ちよくないならこの世に快樂なんて存在しないだろう。そんな馬鹿な事を一瞬本気で考えていた慶太郎は、逸らそうとした視線が勝手にエデルに向いてしまう事に逆らえなかった。

どうしても見てみたかった。あの大きな乳房の間に擦り上げられている自分の姿を。抗いがたい欲求に顔を向ける慶太郎は、卑猥すぎる光景にまたしても目を奪われる。

自分の乳房を持ち上げ、両側からペニスを挟み込んで上下に揺らす。たったそれだけの行為がこんなにも淫靡いんびだなんて。それに擦れる時の音もだ。

にゅっぶ、にゅっぶ、によぼぶ、にゅぶぶぶぶ……まるで漫画じみた擬音でもつきそうな感じの音が乳房の間から漏れ聞こえてくるのだ。

あまりに淫猥な光景に肉棒が再度張り詰めてゆくと快楽が増していつて、思わずそのままもう一度出しそうになった慶太郎だが、その時エデルの言葉を思い出して慌てた。

粘膜接触を行う、その為に大きくする、それはつまり慶太郎のペニスに勃起したらセックスをするという事ではないのか？

それだけは不味い。絶対に不味い。そう感じるのだが、それとは裏腹に頭の片隅では「セックスが出来る。こんな綺麗な女とセックスが出来る」と喜んでいる慶太郎がいた。

こんな美女にここまでされて、しかもこの後もOKだなんて分かっていて、逆らえる方がおかしい。けれどそれは普通の場合ならの話だ。

何せこの女は異世界の悪魔で、セックスをするのは慶太郎を魔王として覚醒させる為なのだ。そんなの絶対に無理だ。

しかしさっきのフェラチオの快楽が、今のこのパイズリの快楽が、慶太郎を捕らえて放さない。今からこれ以上の快楽を得られると知って、若い肉体が止まるはずがない。

頭の中で声がする。大丈夫、魔王に覚醒なんてしない。俺が魔王のはずがない、きつとエデルが勘違いしているんだ。だからしても大丈夫だ。

欲望という名の囁き声ささやにペニスは痛いほど勃起して、口の中には生唾が溜まってゆく。それを飲み干すゴクリという音がエデルにも聞こえたのか、彼女はパイズリを中断した。

乳房をゆつくりと開くと、そこでは蒸れた肉棒が先走りをダラダラ零して糸を引いていた。赤黒く張った龟头は見た事がないほどいきり勃っている。こんなに勃起したのは生ま



れて初めてだった。

ピクンピクンと震えるそれを満足そうに確認したエデルは慶太郎から少し距離をとるとドレスに触れる。するとドレスはまた独りでに脱げていつて、半裸だった女悪魔は完全な裸体へと進化した。

そしてその身体を部屋の床に横たえようと、淫らに脚を開き、両手を開いて慶太郎を迎え入れようとする。

「我が君……どうぞ、お使い下さい……私の身体を使って、完全なるご覚醒をなさって下さいませ」

照れているような、それでいて悦んでいるような、そして名誉ある役目に恍惚としているような、そんな表情でエデルは慶太郎を見つめてくる。

エデルとは逆に身体を起こした慶太郎は、眼前に横たわる悪魔の姿に呆然と見入った。美しいというよりも淫靡、可憐というよりも妖艶、本当に悪魔だと実感できる肉体美だ。

しかもここまで男を責めておきながら最後の一線はこちら側から越えさせようとする。どこまでも悪魔だ。悪魔の誘惑だ。

それに負けるのは古今東西人間の恥だとされてきた。逃げるなら今だ。今しかない。これが最後のチャンスだ。

寝転がっているエデルに背を向けて部屋から飛び出し逃げる。その最後の機会が今だ。警告音のように理性がそう叫ぶ。



瞳をトロンと潤ませて涎を垂らす媛乃の顔。幼い頃からの付き合いで、媛乃のどんな表情も見てきた慶太郎でさえ初めて見る蕩け顔だ。そのあまりの可憐な淫靡さに雄の本能が止まらない。

口の端から垂れる涎を舐め、そこから首筋に唇を移動させ甘い媛乃の香りを嗅ぎながら何度も滑らかな肌に吸い付く。

「あ、やつ……ん、んん！ ま、つて、けいたろ……あ、ああ！ んッ!!」

慣れない刺激に身体をピクつかせ喉を鳴らす媛乃に、それでも慶太郎は触れる事をやめられなかった。

待つてという言葉は耳に届いていて、少し落ち着かなきゃいけないとは分かっている、心地いい媛乃の感触と脳を浸す香りに身体が止まらない。

だから唇はどんどん下つていつてやがて鎖骨に到達し、その下にある膨らみを揉み舐めたいという衝動を抑えきれなくさせた。

「ひめの……むね……おっぱい、み、見ていいか？」

勿論見るだけで終わらないと慶太郎もそして媛乃も分かっていた。なので少しだけ戸惑う媛乃だが、嫌がる素振りは見せず自分からセーラー服の上着を脱いでいった。

滑らかな素肌に二つの膨らみが乗っていて、そこに無地のブラジャーが被さっている。媛乃が器用に寝たままそれを外すと、中から大きな乳房が零れてきた。

エデルに比べると小振りだが、それでも同世代の少女達と比べれば大きいだろう。着瘦

せするタイプなのだと思ふ慶太郎だった。

形は左右均等で、乳輪と乳首は綺麗な桃色。それがキスと軽い愛撫の期待感で淡く勃起し始めていた。

ガン見する慶太郎に媛乃は顔を逸らした。本当は胸を隠したいのだろうが、それをシートを握り締める事で必死に耐えている。

羞恥に震える幼馴染みの姿が慶太郎の欲望を刺激した。思わず手が伸びてその硬くなりかけている乳首に触れてしまった。

「ひゃあああ！ あ、つくう！ う、うう……」

「あ！ ご、ごめ……わるい！」

人に触られるのも初めてのところにいきなり乳首なので過敏に反応してしまう。慌てて手を引く慶太郎に媛乃は、

「……や、優しく……もつとゆつくり、やって……おねがい」

「わ、分かった……ごめん」

頷いてから深呼吸。そして頭の中で何度も「丁寧に優しく」と繰り返す。暴走しそうになる気持ちを抑えながら慶太郎はもう一度指を乳房においた。

今度はいきなり乳首から触ったりはせず、柔らかな乳房肉から揉み込んでゆく。

五本の指を両手とも使って、二つの乳房を万遍なく。丁寧に捏ね回し揉みほぐす。くにゅんにゅんと指の中で形を変えるお肉が卑猥で可愛らしい。

「けい、たろお……ん、んッ……や、あ……あ、あん！ あ、ああ、つ……ひやあ！」

甘ったるい声が漏れてきた。それは媛乃本人でさえ初めて聞くような声だった。

感じてくれている。そう思うと慶太郎は喜びと興奮が混ざり合つて逆上のぼせた。それでもつと感じさせたい、媛乃を悦ばせたいと思つてしまう。

だから夢中になつて指を動かしていると、その動きがドンドン手慣れた物になつてゆく。それは間違いなく前世で憶えた動きだった。

昨夜エデルとした時と同じように、ただ一心に没頭している慶太郎は自然と魔王時代に培つた性技を使つてしまつてゐるのだ。

本人はその事に全く気付かずにいたが、されている媛乃にとつては一大事だ。ぎこちない動きだけでも充分刺激を与えられていたのに、それがいきなり慣れた技に変わつてしまつたのだから。

「え？ あ、なに、これ……あ、あああ！ ん、ま、まつて、けいた……あああ！ んんあ！ ひ、ひいああ！ んんんッ!!」

拙つたなく動いていた指は滑らかに乳房の肉を捏ね、指先はその中で乳輪を焦らすように撫でてゆく。増幅してゆく刺激は乳首に蟠つて、そこをピンピンに硬くさせる。

今迄経験した事がないくらい自分の乳首が勃起している事実に媛乃は首を左右に振つた。ちよつと待つてと言おうとするが口を開けばそこからははしたない声が出てしまうし、手はシーツを握るので精一杯だ。

身を振つて悶える媛乃は遂に慶太郎の指が乳首に触れると、

「きゃああ！ ん、んんうッ!! ひ、っひう！」

腰を浮かせて刺激に反応した。勃起した乳首を弾かれるように触られ、そこから側面をシゴかれる。先端からの強すぎる快楽が背骨をビリビリと駆け抜けて鳥肌が止まらない。

「だめ、けい……た、あああ！ んああ!! それ、う、ううう！ んんんうううう！」

ダメという言葉聞いた慶太郎は止めるべきかと思つたが、それより先に身体が動いて驚くほど硬くなつた乳首を躊躇もなく口に含んだ。そうしたいという欲求に逆らえなくなっているのだ。

明らかに自分が変化している事にまだ気付かない慶太郎は、口に入れた媛乃の甘くて美味しいグミみたいな感触の乳首を舐め可愛がる。だけでなく甘噛みあまがまでする。

「あ！ あ!! あああああ！ そんな、あああああ!!」

耐えきれず慶太郎の頭を抱きかかえた媛乃は自在に動く舌が乳首を転がす感触に涙を溢れさせた。強すぎる気持ちよさが止む事なくずっと脳内に流れ込んできて、それに対し処理が追いつかなくなっている。

勃起した乳首を根元から先端へ何度も舌先で擦られ、昂らされたそこを乳輪ごと吸い込まれる。勿論乳房は揉まれたままだ。

際限なく高まってゆく快楽が奥から蜜を零れさせた。それは下着を汚し、ストッキングまで濡らしてゆくが、胸からの刺激に精一杯の媛乃はその事に気付けなかった。すると慶



太郎が乳首責めを止めて身体を離す。

限界近くまで乳首で昂った媛乃は細かく呼吸を繰り返しながら潤んだ目を開ける。そして見たのは、下半身へ移動してゆく慶太郎の姿だった。

快楽の痺れで上手く動けない媛乃だったが、必死で太腿を閉じた。総てを受け入れる気持ちはあるが、それでもそこを見られる事への羞恥が消えて無くなるわけではない。だがそんな抵抗も、

「……見せて媛乃……見たい。こっち……見たい」

必死な顔でそう言われると続かなくなる。両手で顔を隠した媛乃は脚の力を抜いた。

膝に手を当て押し広げる慶太郎は、スカートの中で籠もった香りが漂ってくる。既に勃起している肉棒がパンツの中で痛いくらいに膨らむのを感じた。するとその香りがもつと欲しくなる。

堪らず顔を近づけて匂いを吸い込む慶太郎は媛乃の股間を間近で見つめた。そこはクロツチ部分に愛液の染みが出来ていて、それが卑猥な形状を浮かび上がらせていた。

「すげえ……メツチャ濡れてて、エロい匂いする」

つい声に出してしまふ慶太郎に、そこで初めて自分が濡れている事に気付いた媛乃が「あ！」と言って足をバタつかせた。

「や、やだあ！ やめ……見ちゃダメ……嗅いじゃダメ、けいたろうのパカあ」

泣きそうなその声に慶太郎の興奮は高まる。子供の頃から媛乃が泣きそうになると凄く

狼狽うろたえてしまう慶太郎だったが、この泣き声にはどうしようもなく胸が高鳴った。

もつと啼かせたいと思つた慶太郎は「ごめん」と小さく言うとストッキングを下着ごと一気に脱がせた。すると中から蒸れた匂いと共に雌器官が現れる。

媛乃のそこは土手肉の上に少しだけ濃いめの陰毛が茂り、そこから僅かにセピア色をした肉秘裂が始まっている。ちよつとだけ勃起した陰核は綺麗なピンク色で可愛らしい。

見られてしまった事に覚悟を決めていても流石に目を白黒させる媛乃は、脚を閉じかけてしまう。しかし慶太郎の手がそれを許さず逆に広げさせた。

完全に晒され、中の粘膜穴まで見えるようになったおま○こ。大陰唇はもつちりしていて陰ピラは濡れクネっていた。

長年隣にいた幼馴染みにこんなエロ器官が備わっていたなんて。驚きと興奮が慶太郎の目を釘付けにする。

自分の総てが見られてしまった事で媛乃の身体からは力が抜けていった。その隙を狙うかのように慶太郎の指がクリトリスを触ってきた。

乳首よりも強い衝撃が媛乃を襲つた。お尻を跳ねさせて「あああ！」と叫んだ媛乃はダメという言葉さえ出せないまま敏感な肉芽を弄られてしまった。

包皮越しに側面から、散々焦らすように撫でてから今度は先端を。やっぱり慶太郎の指の動きは手慣れているそれだ。

女性の秘所なんて、無修正画像を除けば昨日見たエデルのが初めてで、しかもその時は

触るチャンスさえなかったはずなのに。

それでもまだ自分が魔王時代の記憶を使っているなんて気付けないでいる慶太郎は、クリトリスの感触を目一杯楽しむと今度は下へと指を移動させた。

淫猥に膣口をヒクつかせるそこを指を使って丁寧に、緩急をつけて、決して穴の中に指を入れたりほしないで責め込んだ。

「あつ！ あうツ！ ああ、あああああ！ んんん〜ツッ！」

シーツを握り締めおま〇こ弄りに悶える媛乃は腰の奥からやってくる感覚が抑えきれなくなった。それがアクメだと少ない自慰経験で理解すると、

「だ、め……けい、だめえ……え、え、あうん！ んん！ んんあ、あ、あ、ああ!!」

喉奥から声を搾り出して訴えるが、既にその腰は淫らにビクついている。そして遂に一際高い「ああああ！」と言う声と共に媛乃は慶太郎の指で絶頂を迎えた。愛液を垂らしていた膣口からは結構な量のアクメ汁が飛び出し、シーツと慶太郎の指を汚した。

腰を高く浮かせてアクメに震えていた媛乃がようやくダレると、慶太郎は指を離して手についた愛液を見た。自分が媛乃をイカせた。その事に今更ながら驚いてしまう。

指で女をイカせるなんて初めての経験で、何を言えればいいのか分からずに戸惑いながら媛乃を見た慶太郎は理性が爆発する音を聞いた。

制服を半脱ぎにした状態で乳房を揺らし脚を広げて横たわる幼馴染みの少女。あの媛乃が見せる雌じみた表情と肉体に欲望が止まらない。

袖を引かれて向かう先は鴻宮学園である。だが二人は真つ直ぐ教室へは行かずに、学舎端にあるトイレへと入った。

そこは来客用のトイレで、普段は鍵がかかかっていて使えなくなっている。その鍵を持っている媛乃は、人目につかないよう気を付けながら慶太郎を連れて中に入る。そして個室に入った二人は照れたように顔を見合わせてキスを始める。

「ちゅ、ちゅぷう、ちゅ……んん！ んぁ……わ、わかつてるの？ 慶太郎の、せい……なんだからね？ ……ちゅぷ」

「わかつてるよ」と頷く慶太郎はその手が媛乃のお尻に向かうのを止められなかった。柔らかに弾力のある尻肉が手の中で揺れる。

「んんん！ も、もう……いきなり……」

媛乃はそう言いつつ、自分から唇を押し付けた。そして長く慶太郎の舌をしゃぶると、「けいたろおが……あの悪魔と……んん！ あ、朝からしなければさ、こんな……学園でなんて……んぁぁ！」

それがこんな場所で二人が盛り合っている理由だった。勿論対外的な、ではあるが、フェラチオだけでも魔素を流れ込ませる事が出来るエデルは、隙あらば慶太郎を襲い、機会があればそのままセックスにまで持ち込んでくる。

すると当然媛乃も魔素を清める為に、仕方なくセックスの回数を増やさなければいけない。それもなるべくエデルが邪魔をしてこない場所だ。

結果として、学園がその一番の恰好の場所となり、二人は登園する度に色々な場所で身体を重ねていた。とんだ変態カップル状態である。

媛乃もそれを理解してはいるのだが、しかし慶太郎を魔王にさせない為という名目が雌になりかけている若い身体を欲情させてしまう。

だから今日もこうして一限目が始まるまでの時間を利用して慶太郎をトイレに連れ込んでいる。

勿論精力が増しくついている慶太郎はそれに応えないなんて出来るはずもなく、キスをしながら肉棒を激しくいからせてゆくのだった。

激しくキスをしたままスカート越しにお尻を揉んで、媛乃の中央部に熱を籠もらせる。そして火照ったのを確認するとスカートの中に手を入れてストッキング越しにいい場所を擦る。

蜜が零れて染み出してきて、媛乃の黒いストッキングの真ん中はお漏らしをしたみたいになっている。その一番濡れている場所に慶太郎は中指を押し込んだ。

「きゃあう！ う、ううう！ あ、あんん！ だめ……それ、だめえ……んん!!」

立っていられないくらい気持ちがよくて、媛乃は慶太郎にしがみつきながら脚を震わせた。

すっかり魔王時代に憶えた技を躊躇なく使うようになってきている慶太郎だった。そんな指技に媛乃は甘い声を出してビクつきを大きくしていった。

「ひめの……すっごい濡れてきた……めっちゃ熱くなってる……ほら、グチュグチュ音するし」

「い、言わないでよお！ けいたろうの変態！ ううう……もう、やだあ……」

泣き声を上げた媛乃は慶太郎から離れた。怒らせたかと思う慶太郎だったが、媛乃は狭い個室の中で器用にスカートを脱ぎ、ストッキングと下着をおろすと後ろを向いた。

「……けいたろうのせい、なんだから……ね？」

それはこんなに濡れた事がなのか、それともこうなったそもその原因の事なのか。言っている媛乃さえよく分かっていない。

ただ分かるのは、媛乃のそこがピンク粘膜をぐちよ濡れにさせて穴をヒクつかせている事だけだ。

幼馴染みの少女が見せる痴態にすっかり逆上させた慶太郎は慌ててズボンを脱ぐと今朝二発抜いたばかりだというのにピンピンに勃起している肉棒を取り出した。それを指で摘まむと媛乃の小さな穴へと押し込む。

「入れるぞ」と呟くと「うん」という声が返ってくる。そのまま二人の若い生殖器は驚くほどすんなりと繋がった。

痺れるような気持ちよさに、媛乃のお尻を挿んで慶太郎は腰を振った。後背位なのでお尻に腰が当たりパンパン！ と激しく音がする。

その恥ずかしさに媛乃は首を左右に振ってもっとゆっくりやっつてと言おうとするが、

「あ、ああ、あんっふう！ んん！ んああ！ ひあ！ ああああ！」

出てくるのは甘い悶えばかりだった。そんな媛乃の声がより慶太郎の腰を乱暴に突き動かす。

グツグツグツ！ とやつと肉棒を咥え慣れてきた膣中に責め込む慶太郎は、媛乃の甘い声が一際高くなる場所を集中的に突いた。

時間も無い中で、それでも精一杯媛乃を乱れさせ、その蕩けきつた中に射精したかったのだ。

「だ、め……けい、ひゃあ！ んん！！ そこ、ばっか……らめえ……んんううう！」

淫らで可愛い声がトイレ中に響いた。慶太郎はそれに我慢が出来なくなり、上体を倒して背中に覆い被さると後ろから胸を揉んだ。

制服を捲り上げ弾け出させた乳房をブラを外して揉み込む。そして首だけ後ろを向かせた媛乃の唇を奪う。

少し辛い体勢だが、それでもこのままイキたいと願う。だからひたすらキスを繰り返して唇の感触を味わい、乳首を指先でコリコリと虐めた。

強くなつてゆく快樂に媛乃の膣壁がグネグネとうねった。それは本人が一番よく分かっている、

「けい、んん！ んちゅ、ちゅぷ……わたし、イ、く……んん！ んんうう！」

腰を振る慶太郎は「イケ」と言葉をかける代わりに乳首を扱いた。そして腰を一番奥へ

と突き込む。瞬間、媛乃の身体は大きくビクついた。

「ああああああ！ ん、んんああああ！ あ、あああ、う……ううう」

鳥肌を立てて仰け反り果てる媛乃の膻肉が限界まで昂った肉棒を締め付ける。そこを張り切った雁首で擦ると、甘ったるい感触が会陰から昇っていった。

「あ、つく……ひ、めの……お、俺も……つくう!!」

そう声を漏らして腰をお尻に密着させた慶太郎は一番深い場所で精を解き放った。

どっびゅ！ どっびゅ!! びゅ！ ぶびゅ！ ぶびゅううう！ どびゅ！ どびゅぶ！  
びゅ、びゅ、びゅ、びゅ!!

アクメった膻への射精に雄の本能が満たされる。と同時に気怠いような感覚が一気に増した。魔王としての力が削られ、その一端である凄まじい精力が弱くなったのだ。

疲れきった感覚でそれでも媛乃を抱き締めて最後の一滴まで蕩けた肉壁に撃ちかけた慶太郎は、総てが出終わると息を吐いて腰を引いた。

肉棒が抜けると赤い肉穴からは精液が零れてくる。フラついた媛乃は便座に腰掛けると脚を広げただらしない格好で慶太郎に微笑んだ。

こうして朝から女悪魔と幼馴染みを抱いた慶太郎は、その後もやっぱり交互に抱き続ける事になる。

家に帰ると魔素が薄まったのを見て怒ったエデルを鎮める為に自室で抱き、それに対し



て文句を言う媛乃をリビングで抱く。

それからも風呂呂場やトイレや色々な場所で慶太郎は二人の美女相手に凄まじく爛れた一日を送る。

悪魔と幼馴染み。その二人と一緒に暮らして、しかも両方とセックスするなんて以前の暮らしからは想像も出来ない。当たり前だが。

当初は三人で暮らす事を慶太郎が無理だと言いつ張っていたが、エデルは他に行き場所がないし、媛乃も隣の家はもう組織に返却してしまったと言っていた。

悩みに悩んだ挙げ句、こうなれば何でも来いな気持ちで、最終的には三人での暮らしを受け入れた慶太郎なのだ。

実は媛乃の両親が本当の親ではなく、同じく組織のエージェントだと知った時は流石に面食らったが。

しかしそんな暮らしがまさかここまでエロエロに満ちているなんて。実際に経験していてもまだ現実味が薄いと感ずる慶太郎だった。

だから少しでも状況を整理してみたくて、一人になると色々と考えてみる。自分の事、そして媛乃やエデルの事を。

エデルとしては慶太郎の完全なる覚醒が目的だから、その為に必要な事は何でもしてくるだろう。実際隙あらばセックスしようとしてくるし、それに媛乃に手をかけようとするのもアレは冗談などではない。真剣だ。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**